

「私の日中友好」 20人が熱弁

第34回全日本中国語スピーチコンテスト

「第34回全日本中国語スピーチコンテスト全国大会」が1月8日、東京・文京区の日中友好会館大ホールで開催され、(公社)日中友好協会が行う日中国交正常化45周年の記念行事が華やかにスタートした。19の都道府県大会を勝ち抜いた20人が学習成果を競い合い、「私の日中友好」を熱弁した。

大会は、高校生・大学生・一般の3部門で行われ、5分間のスピーチと質疑応答で競い合った。主催者を代表してあいさつした橋本逸男副会長は、「34回にわたり続けているのは皆様のご支援のおかげ。中国理解のために中国語を学ぶことの意義、役割は大きく、この大会が日中両国関係の改善につながるよう願っている。今後は都道府県大会をより活性化させたい」と述べた。

審査委員長の塚本慶一・杏林大学教授は「節目の年に、歴史と伝統のあるこの大会が開催されることを大変うれしく思う。出場者の皆さんは中国への思いを全力で伝えてほしい」と激励した。

高校生部門では、戦時中に中国で暮らした曾祖父から伝わる話と自らが訪中して学んだ「日中戦争」について語った埼玉県代表の市ノ川瑞希さん(県立伊奈学園総合高校3年)が、大学生部門では、長春での留学中に参加した運動会において、日の丸を掲げて入場することになったエピソードを友好の思いをこめて紹介した埼玉県代表の西村愛未さん(神田外語大学4年)がそれぞれ第1位に輝いた。

一方、一般部門では長野県代表で教員の二木さんが第1位となった。二木さんは、日本



中国服を着てスピーチする大学生の出場者



橋本副会長から日中友好協会賞を授与された二木さん(右)

で習い始めた二胡への思いが、大連留学中に知り合った二胡の先生との心の交流を通じてさらに強まっていったことを紹介。全入賞者の中から日中相互理解に貢献した一人に贈られる日中友好協会会長賞も受賞した。

当日は、汪婉・駐日中国大使館参事官ら来賓をはじめ、出場者の家族や友人など約 150

人が観覧した。また朗読部門入賞者による発表会も行われた。大会は外務省、文部科学省、中国教育省、NHK などが後援。各部門第 1 位の 3 人には副賞として中国旅行が中日友好協会から贈られ、協賛の全日空が航空券を提供した。



出場者の家族や友人など多くが来場した

二胡と私



一般部門第1位／長野
県代表
二木 玲

10年前ふとした興味からインターネットで安い二胡を買い、独学で始め、何人か日本人の先生に教わりました。曲は弾けるようになりましたが、自分の演奏に全く満足できず、何度もやめようと考えました。「中国人でも音楽家でもない私が弾きこなせるわけがない。ではなぜ二胡を弾くんだろう?」。何度も自問しましたが、答えは出ませんでした。

3年前私は大連に短期留学し、高先生を知り、先生の二胡の演奏に衝撃を受けました。日本人の二胡奏者に比べ、荒々しく大胆で、情熱的で、私の心を大きく揺さぶりました。本来の二胡の奏でる音楽はこういうものだったのかと思いました。その場で高先生に「二胡を教えてください」とお願いし、引き受けていただきました。

高先生の教え方は独特でした。まず1曲を通して弾かせ、間違いを指摘し、正しい弾き方を見せ、そして先生と一緒にその曲を弾かせる。間違える度にもう一度最初から弾き直させ、1曲全部を通して弾けるようになるまで繰り返し何度も一緒に弾いてくれました。高先生にとって私はただの見知らぬ日本人であったにも関わらず、本当に真剣に教えてくれました。新しい曲を弾く時、先生はいつも、自ら書いた手書きの楽譜を用意し、私がお礼を言うと「あなたが中国に来るのは簡単なことではなかったはず。ここで過ごす時間はとても貴重だろうから、私ができることは何でもするよ」とおっしゃってくれました。

私は心から感動しました。先生にとっては、どこの国の人か、何の仕事をしている人かはどうでもよく、大切なのは、二胡を心から愛しているかどうかということ。先生が、私が二胡を弾けると信じてくれるならば私も信じようと思いました。

ある日、先生と二胡を弾いていて、とても不思議な感覚を覚えました。先生の感情が私の感情に重なり、2人の感情が二胡に伝わり、まるで二胡が歌を歌っているかのように感じました。それまでは二胡は二胡、私は私でしたが、この日は私は二胡と一体になったように感じました。私は初めて、自分自身の二胡の演奏に満足することができました。

私はますます二胡が好きになっています。ただの楽器ではなく、パートナーです。二胡と一緒に中国へ行き、素晴らしい先生に出会い。おかげで今も中国文化への理解を深めることができます。

なぜ二胡を弾くのかと問われたら、私は答えます。「なぜなら私は二胡が好きだからです。私は自分が生きている限り、二胡を弾き続けたいと思います」

我が家に伝わる宝



高校生部門第1位／
埼玉県代表
市ノ川 瑞希

私の母方の曾祖父は日中戦争時に満州鉄道を作るために移住して働いていました。当時は日本の侵略により日本人に恨みを持つ人も多かったのですが、ある夫婦にとっても良くされて、馬の乗り方や中華料理の作り方を教えてもらいました。中でも餃子は絶品で、曾祖父から祖父へ、祖父から母へ、そして私へと代々受け継がれてきました。曾祖父は私が産まれる前に亡くなりましたが、小さな頃から祖父や母から中国人は本当に親切だという話を聞いてきました。

昨年の夏休み、学校の日中交流事業の一環で天津と北京へ行きました。北京行きの飛行機の中で何か見ようと探していたら、抗日映画やアニメの数がとても多く、中国では抗日ものがこんなにも身近なのかと驚きました。私は「小兵张嘎」という子供向けの抗日アニメを見ました。アニメの中の日本軍は非人道的で酷いものでした。天津の友だちが私にくれた小学3年生向けの教科書にも残酷な日本軍に立ち向かった勇敢な青年の話が載っていました。また、北京の抗日記念館では、大量虐殺や生首など数々の酷い写真や映像に心を痛めました。それまで日本が加害者としての戦争の写真は見たことがなく、教科書に載っている「日中戦争」に関するたった数行の記述だけではわからなかった惨状でした。過去にこんなことがあったなんて、悲しくて申し訳なくて心がずっしりと重くなりました。

近年の日本ではメディアによる中国批判が目立ちます。その影響からか、中国人にあまり良い印象を持たない人も少なくありません。しかし私が出会った中国人は皆、本当に親切で優しく素敵な方々でした。これも中国へ実際に行かないと分からないことでした。色眼鏡をかけて中国人とはこういう人たち、とひとくくりにするのではなく、一個人として見なくてはなりません。曾祖父に親切だった夫婦は、憎い日本人だとひとくくりせず、一個人として、友人として接してくれたのだと思います。

日中関係の改善に必要なのは過去を水に流し新しい関係を築くことではありません。確かに日中間には悲しい過去があります。しかし見たくないものから目を背けず、両国の文化を知り、歴史を受け止めて初めて日中友好への一歩を踏み出せず、一個人として、友人として接してくれたのだと思います。

日中関係の改善に必要なのは過去を水に流し新しい関係を築くことではありません。確かに日中間には悲しい過去があります。しかし見たくないものから目を背けず、両国の文化を知り、歴史を受け止めて初めて日中友好への一歩を踏み出すことができます。

私は周りの人たちに本当の中国を伝えていきたいと思います。祖父や母がそうしてくれたように、自分の娘にも曾祖父の話、中国人は本当に優しいんだということ、日本が中国にした酷いこと、私が中国で感じたすべてを伝えたいと思います。曾祖父が伝えてくれた伝統の餃子と共に。

あの運動会を一生忘れない



大学生部門第1位／埼玉県代表
西村 愛未

私が長春の東北師範大学に留学し、留学生生活がほぼ半分過ぎた時、1年に1度の運動会が開催されました。毎年留学生と中国の本科生が一緒に参加し、各国の留学生が自分の国の国旗を掲げて入場する、ちょっとしたオリンピックのようなものだと思っていました。しかし私たち10人ちょっとの日本人留学生は日の丸を掲げることに抵抗があり、だれも運動会に参加したいと思いませんでした。

日の丸が中国人にとってどのような意味を持つか、中国を知る人ならきっとわかるでしょう。日の丸を持って入場したら、「日本鬼」と罵られ、石などを投げつけられるかもしれません。そのような不安から、運動会参加へのプレッシャーは大きなものでした。私は中国人の友人に相談しました。彼女は「実は、以前は日本のことがあまり好きではなかったけれど、あなたと出会ってから日本のことが好きになった。運動会には必ず参加してほしいし、もっと多くの人に日本を理解してもらい、日本を好きになってもらうべきじゃないかしら」と話してくれました。そういえば、私が影響を受けた高校の先生は「中国語を心から愛するには中国を理解し、たくさん中国の友人を作り、お互いを尊重しなければいけない」と言っていました。まさに今この言葉を実践する時が来た、こんな貴重な機会を逃すわけにはいかない！ 私は運動会に参加することにしました。

運動会当日、私と他2人の日本人留学生はどんなことがあっても最後までやりきると決めました。雄壮な「運動員行進曲」が響き、会場は先生方や生徒、観客でいっぱいとなり各国の代表学生が国旗を掲げて入場待機をしていました。私はドキドキしていました。そして「次は日本代表チームの入場です。暖かい拍手でお迎えください！」というアナウンスが流れました。

私の心臓は今にも飛び出しそうでした。他の2人を見ると、やっぱり表情はこわばっていました。私は冷静を保ちながら歩き続け、スタンドの前に来た時私たちは一斉に国旗を頭の上で広げました。

想像していたものとはまるで違い、罵声やあざけりの声はなく、それどころか周りからの拍手は大きなものに聞こえてきました。涙で両目はかすみ、スタンドにどのくらい人が座っていたか分からず、周りの人の表情も見えませんでした。多くの観客の視線と声援に感動しました。私たちは胸を張り大きく歩いていきました。

この経験のおかげで私は大きく成長でき、後半の留学生生活も充実したものになりました。同時に、私の未来に対する自信をもたせてくれました。